

離周辺町村居住の消費者の強い支持によって中心商店街は成り立っている。統計上の商圈はさらに広範囲に渡り、新潟市と県中部以北の地域をほぼ二分して商圈に含み入れている。

現在、長岡市は中心商店街が独占的商業核を構成して他の商店街との商店街力格差が大きい。そこで今後の関越、北陸高速自動車道、上越新幹線の高速度交通体系の整備を契機に、今までの線の商店街を面的、空間的方向に再開発する、長岡ニュータウン建設の構想が着々と実行に移されている。完成後は人口25～30万人に達する予定であり、日本海地域における魅力ある地方中核都市の一つに発展することが期待されている。

大川市の家具製造業に関する地理学的考察

古賀 秀美

筑後川河口に位置する大川市はわが国有数の家具産地である。論文では、存立基盤を中心に大川の家具製造業の動向と実態を明らかにすることを目的とした。

まず、序論でわが国の家具製造業について概説した。第一章で地域の概観を行なった。第二章で大川の家具製造業の概観を行なった。そして、第三章で存立基盤としての原材料・技術・労働力・輸送・市場を明らかにした。第四章では、問題点と今後の展望を考察した。

卒論要旨は次のとおりである。

大川は伝統的家具産地である。近年の発展は著しく、多種多様の家具を産する全国一の家具産地となっている。零細企業の集団地であるが、徐々に企業規模拡大がなされ、又、流通の近代化も進められている。

原材料である木材は昭和20年代前半まで筑後川上流の日田から筏流して運搬され利用された。筏流し中止を契機にわが国家具製造業界の原材料変革に応じてゆき、現在、完全に外材依存となり、合板も利用される。大川には、家具製造業関連産業としての製材業・合板加工業・原材料販売業が発達しているため原材料が効率よく供給される。

木船製造技術を根底にしたのが大川の伝統的手工業の技術であった。それは決して優秀な技術ではなく、昭和30年代以降の機械化とともに自然消滅した。現在機械生産がなされ、その結果大量生産・品質向上に成功した。

大川市一帯は農村地帯で、農村の安価な余剰労働力利用を家具製造業の立地要因のひとつとしていた。現在、以前と同様労働力は川とその近隣市町村から供給されているが、高度成長期以降労働力不足の傾向が現われている。しかし、大都市産地と比べれば労働力の確保は容易であろう。又、石油ショック以降労働力不足は緩和されている。

大消費地が隣接せず原木の産地でもない大川にとって、製品移出、木材移入に輸送は不可欠のものである。昔は筑後川・若津港を利用した水運に頼っていたが、鉄道・トラック輸送へと移行してゆき、現在、全国津々浦々、戸口から戸口への輸送が可能なトラック輸送主流である。近年の道路網の拡充・トラック輸送の発達市場拡大を促がし大川を発展へ導いた。

大川は現在、全国的な製品市場を有している。これは、需要の増大・輸送面の発達に依っている。特に、高度成長期の旺盛な家具需要に支えられ、市場拡大は実現した。この市場拡大は大川の家具製造業を発展させた要因である。

わが国の高度成長の波に乗り、大川はめざましい発展を遂げた。しかし、低成長時代を迎えた現在生産過剰状態にあり、又、公害問題等を抱えており、その将来は必ずしも樂觀できない。低成長時代においては、消極的となった消費性向をふまえ、市場調査・製品の開発・生産技術の改善等に努め、市場競争力のある産地となる必要がある。

相模大山における山岳信仰の地理学的考察

小 寺 和 代

以前から、自然と人間の生活、そして文化の関係に興味を持っていたために、卒論をその興味への第一歩とすることが当初の目的であった。そして、大山の山岳信仰を扱うことにしたのだが、それはこの信仰形態が、宗教的でないといわれている日本人の文化の最も基層を成している心情に触れているのではないかと期待したためでもあり、また、山岳信仰は教理体系の整っていない民間の信仰に起源を持つものが多く、自然と信仰の関係について考えることができるだろうと思ったためでもある。しかし、具体的によい方法がわからなかったために、この論文では文献の調査を基礎にして、信仰の成立について若干の考察、さらに信仰圏と御師集落について調査を行なった。

調査地域大山は、神奈川県ほぼ中央にある伊勢原市内の一地区であり、大山の山頂（海拔1246m）は、伊勢原市、厚木市、秦野市の市境にあっている。

この大山は古くから、民間の信仰を集めてきた山であるが、大山信仰を農耕に關した雨を呼ぶ山としての信仰をみると、相模平野に住みついた人々の間から発生したと考えられる。しかし一方で、相模湾や外房で航海神としての信仰もかなり古くからあったようである。やがて、民間信仰の山、大山には神道、仏教、そして修験道がはいつてきて、神社仏閣が建てられ、様々な形で大山信仰は展開していった。そして、江戸時代には、江戸町人や関東一円の農民たちの大山詣で、信仰の隆盛期を迎えた。「大山開導記」による近世末期の信仰圏は、関東全域をおおい、さらに福島、長野、新潟、静岡の方面へと拡大している。このように遠くまで信徒を得るようになったのは、山麓の御師集落に坊を構え、信徒の登拝の世話などをしていた大山御師たちの活動のためと考えられる。そして大山街道という参詣ルートも整備された。

その後、大山は神仏分離による混乱などを経て現在に至っている。現在、大山の集落には53軒の旅館（うち51軒が先導師旅館）があり、家族労働で経営されている。しかし夏山などの忙しい時期には2～3人から10人近くのアルバイトを頼んでいる。旅館の規模は小さいものが多く、半数以上が収容人員50名以下である。また、観光客相手の土産物店、飲食店は妻が営み、夫は勤めまたは大山名物の独楽や山菜の製造に従事している例が多い。

大山には現在、講社員が年間2～3万人訪れており、その信仰圏はだいたい関東地方である。また、